

第2回県立高等学校入学者選抜調査改善委員会

議 事 録

- 1 日 時 平成 28 年 4 月 13 日 (水)
午後 3 時 00 分 ~ 5 時 00 分
- 2 場 所 神奈川県教育委員会 委員会会議室
- 3 出席委員等 田中 統治 種田 保穂 林 巧樹
遊部 裕司 松本 一彦 佐藤 均
稲田 義郎 九石 美智穂 土佐 明美
折笠 初雄 (敬称略)

開会

(事務局)

定刻になりましたので、ただ今から第2回県立高等学校入学者選抜調査改善委員会を始めさせていただきます。

早速でございますが、4月1日付けで人事異動がありましたので、事務局の紹介をさせていただきます。

(笠原陽子顧問、岡野親高校教育課長、宮本晋入学者選抜改善担当課長を紹介)

それでは、県立高等学校入学者選抜調査改善委員会設置及び運営に関する要綱第7条に委員長が座長となる、とありますので、進行は田中委員長にお願いいたします。

議事

委員長(田中委員)

それでは、始めます。まず、神奈川県PTA協議会ですが、笹原会長がご欠席でございますので、遊部専務理事に代理出席いただいております。

それでは、議題に入る前に、「会議公開の可否について」でございます。本日は、調査結果及び再発防止策の検討が協議題となっておりますので、協議は原則として公開したいと考えております。なお、調査の関係上、個人情報扱う場合や入学者選抜の特殊事情に関係する場合などやむを得ない場合は非公開とさせていただきますと思いますがいかがでしょうか。

(賛成の声)はい、ありがとうございます。

それでは、協議を原則として公開して行うことといたします。傍聴希望者及び記者を入室させますので、しばらくお待ちください。

(傍聴人及び記者の入室を確認後)

まず、「調査結果の報告」についてです。

報道関係者の方におかれましては、写真撮影についてはご遠慮願いたいと思いますので、どうぞよろしく申し上げます。

委員長(田中委員)

それでは、調査結果について、事務局より報告願います。

(事務局)

それでは、資料に基づき調査結果の概要について、ご報告いたします。

まず、資料1「県立高等学校入学者選抜に係る調査結果について」をご覧ください。

1としまして、採点日数、休憩時間の取得方法等について調査をしています。

その前、(1)としまして、平成28年度入学者選抜の日程について、学力検査から合格発表までの一般的な流れを説明します。2月16日に学力検査を行いまして、19日以降採点・点検し、多くは2月25日に判定会議を行いまして、2月29日に合格発表日を迎えます。採点・点検日につきまして、受検者数や科目数の違いから学校ごとに異なってまいります。

学校ごとにかかった採点日数につきまして、資料2をご覧ください。採点日数について大まかではございますが、0.5日刻みで調査をしました。その結果が1の「採点にかかった日数」でございます。全日制につきましては、1日から長い学校ですと5.5日かけた学校もございます。定時制につきましてはご覧のとおりです。

採点日数と受検者数を見比べられるように、2ページ以降に、各学校ごとの受検者数と採点日数をお示ししています。具体的に、6番の横浜翠嵐高校は647名の受検者、教科は通常の学力検査に特色検査を加え6教科、採点日数は5.5日となっています。

引き続き、前回ご質問いただきました採点時の休憩の取り方について、資料2をご覧ください。休憩の取り方につきまして、全職員一斉に取った学校が全日制で88課程、定時制で12課程となっております。教科ごとに分かれて取っている学校は、全日制41課程、定時制3課程、その他、それぞれ7校、6校となっております。

その他の主な内容としまして、職員全員のローテーションで採点し、交代で休憩時間を約15分取る、あるいは、最初は一斉に休憩を取っていますが、教科によって差が出てきたため、進捗状況に合わせて教科ごとに時間を設定したという学校も記載をさせていただいております。資料にもその他の休憩の取り方を記載させていただいております。

なお、前回の議論の中で自己情報開示件数がどれくらいであったかというお話をいただきました。平成27年度につきましては、497件の請求がございました。これは、全ての答案の開示を求めた件数でございます。平成28年度につきましては、4月12日現在で440件となっております。例年よりも多く開示請求をいただいている状況でございます。

資料1にお戻りいただきます。先ほど説明させていただいた内容につきまして、1ページの(2)及び(3)の表を用いて、相関関係をお示ししています。採点

日数と採点誤りの相関関係、そして、受検者数と採点誤りの相関関係をグラフにまとめております。

本県の場合、他県に比べ、日数に余裕がある状況でございますが、その中で、採点日数が少ないから採点誤りが多いとはいえ、相関関係が見られませんでした。受検者数との相関関係につきましても、受検者数が多いために誤りが多い、あるいは、少ないために誤りが少ないというような傾向は見られませんでした。

続いて、2ページをご覧ください。(4) 休憩時間の取得方法と採点誤りがあった課程数を括弧書きで併記させていただきましたが、全職員一斉に休憩を取っていた学校、あるいは教科ごとに休憩時間を取っていたという違いによる採点誤りの傾向は見られませんでした。

あわせまして、(5) 採点誤りが発生した時間について、調査をさせていただきました。9～11時で99件、13～15時で85件、15～17時で90件の3つが時間帯として多く発生しておりました。前回、14時あたりにミスが集中するというご指摘がありましたが、この表からは読み取ることができませんでした。

採点誤りが採点日数と採点時間に起因するということは見づらい部分がございますが、学校への聞き取りの中で、いくつか見えてきた部分もございまして、ご報告させていただきます。

資料同じく2ページ、採点時間、休憩の取得、採点環境等に起因する原因としまして、(1) 教科によって採点時間が異なるため、他の教科に比して遅れているため、追いつきたい、あるいは早く終わらせたいという心理が働き、タイムプレッシャーがかかっていた。(2) 受検者数が多い学校、特色検査のある学校では、時間的なタイムプレッシャーがかかっていた。(3) 採点環境について、会議室が狭く、他の教科と入り混じりながら採点を行っていたため、集中できなかったということが学校からの聞き取りの中で明らかになっております。

次に、採点誤りの具体例について、資料3をご覧ください。問題別の集計でございます。小計、合計は入っていませんが、主に、記号の選択式、記述式で区分しました。記号の選択式では、選択肢の中から一つ、または複数選択し正しい順番に並べ替える問題、選択肢から複数選択しますが、順不同に解答する問題等を分けまして、それぞれ誤りの件数を教科別に記載させていただきました。

記述式につきましては、用語や数値、あるいは漢字などの記載を解答するものと、まとまった文章で記載をする記述式とで分類させていただきまして、採点誤りのあった件数を記載させていただいております。平成27年度及び平成28年度を併せて報告させていただいておりますが、主に、記述式の利用を数値、漢字の記述でありますとか、まとまった文章の記載の中での誤り、また、選択肢の中から一つを選択する問題で誤りが比較的多いという傾向がございます。

教科別に説明させていただきます。1ページ、左側が27年度、右側が28年度

となっております。丸の中に書かれた数値が実際に誤りのあった件数を表しております。

誤りのあった、それぞれの右側に記載させていただいております数値は、小計合計の誤りの件数ということになります。先ほどの1枚目のものは、左側の正答表の数ということになります。英語で申し上げますと、スペルミスに気づかずに正答としてしまったものが何件かございます。28年度に関しては、問5、6で多い傾向があります。

次に、国語をご覧ください。国語は記述の部分の誤りが多い傾向がございまして、例えば、平成27年度は、問3(イ)の7件、問5の(イ)の11件、こうした記述式の中で誤りが多く見られます。文末指定を見誤ってしまったか、あるいは、誤字に気づかずに見落としてしまったというような誤りが多い傾向がございました。28年度につきましても、同様の結果が見られます。

次に、6ページ、数学につきましては、27年度及び28年度の問7の証明の問題の中で、本来記号を示さなければならないところに、記号の印がなく減点にしなければならないところで減点されていなかったというような誤りが多く見られるということでございます。

次に、理科でございますが、誤字による誤りがいくつか見られます。記述式では、27年度の問5(ウ)の問題で、あるいは、28年度の問5(ウ)の問題などで、誤字による減点ミスというような誤りが見られている状況でございます。

次に社会でございますが、記述式のところでの誤字、脱字等の誤りがいくつか見られます。例えば、平成28年度の問1(カ)に40件と誤りが集中しています。実際に誤りを見てみますと、「輸出品目」の「輸」が「輪」となっていたり、「ザンビア」が「サンビア」になっていたというように、正しい表記になっていなかったことに対する見誤りがございました。それから、小計・合計について様々な誤りが見られましたが、28年度、配点がかなり複雑なものも多くございます。例えば、問2の(ウ)及び(カ)など、配点が異なるものがございますが、そのような箇所での小計の誤りが多く見られます。

それでは、資料1の2ページにお戻りください。ただいま説明させていただきましたもののほかに、一番下、小計・合計等の誤りのイですが、バツの斜線を1点と見誤ってしまったケースがございました。また、3ページですが、点検の際につけるレ点をバツと見誤って小計に反映しなかったケースがございました。

前回の会議で、選択して並び替える問題の中で採点誤りが多いかどうかという議論がございましたが、この部分につきましては、単純なミスに比べて多いという傾向は見られませんでした。実際に学校から聞き取る中で判明したものにつきまして、3点ほど報告させていただきます。誤字や記号の見誤りについては、記述の内容にばかり注意が行ってしまい、誤字や脱字のミスに気付かなかった。そ

れから、正答を暗記して採点を行っていた結果、誤答を正答としてしまった。それから、単純な誤りについては、採点者1の採点が正しく行われているという思い込みから、それを追認してしまう、あるいは点検者が複数いる中で、依存してしまったというようなものがございました。

次に3ですが、採点誤りに関わった採点・点検者の教科及び職の関係について、前回ご質問いただきまして、調査いたしました。資料4をご覧ください。

1ページですが、平成27年度の小計・合計の誤り、それから採点の正誤、平成28年度の採点の正誤と表を分けております。実際には、27年度、小計・合計の誤りにつきましては、下の採点の正誤に比べまして、他の教科の教員が、小計・合計に関わっている方が多いため、数字がそのまま反映されており、当該教科の教員以外の誤りの件数が結果的に多くなっております。小計・合計につきましては、当該教科以外の教員も多く関わっているという実態もあるため、実際は、関わった人数がそのまま比例している傾向がございます。採点の正誤につきましては、当該教科の教員が採点に多く関わっておりますので、結果的に誤りに関わった教職員の数については、当該教科の教員の数が多いので、これは誤りのあった教科の人数に比例しているということで、特段、当該教科あるいは他教科で明確な傾向が見られたというわけではございませんでした。

2ページ、3ページにつきましては、教科別に表にしたものでございます。4ページ、5ページにつきましては、採点に関わった方の総括教諭、教諭などの職名を分けて整理させていただきました。ただ、この点も、職名によって誤りの傾向があるという結果は見られませんでした。

資料5を併せてご覧ください。実際に誤りのなかった30校の一部でございますが、その中で聞き取ったものをいくつか整理しました。

採点・点検時に、管理職や入学者選抜担当が、場面場面で、愚直に丁寧に行ってほしいと職員にお願いしていること、また、注意喚起をしながら、急がず丁寧にとことを言い続けているというお話をいただいております。また、採点・点検時間は教科ごとに異なりますが、採点や点検、小計や合計の区切りで待って、採点が早いからといって、そこだけ採点を始めてしまうことがないようにしていた。また、改めて日を変えて、新鮮な目で再点検に入るようにしているということなど、そういう形をとることでミスを防ぐことができているというお話もいただいております。

次も同じような観点でございますが、採点日を2月19日としているが、22日も採点日として臨時休業とし、余裕を持って採点できるよう配慮している、あるいは、管理職が入選担当経験者であって、採点にミスの起こりやすいところを感覚的に分かっていた、また、教頭の教科が社会で、特に記述のところは神経を尖らせていたなどのお話も出ておりました。学校の聞き取りは、引き続きさせていた

だいて、ご報告させていただきます。

最後に、資料1の4、答案用紙の誤廃棄についてでございます。あわせて、資料の一番最後に、神奈川県教育委員会行政文書管理規則を配付させていただきました。学力検査の答案用紙は、この規則の規定にのっとりまして、保存期間は1年と定められております。規則の第9条の別表に、各種試験の願書、答案等について、1年保存と定められております。ここでいう1年とは、該当の文書进行处理した年度の翌年の4月1日から1年間保存するということございまして、昨年、平成27年2月に実施した、入学者選抜に係る学力検査の答案用紙につきましては、平成27年4月1日から1年間保存をし、この28年4月以降に廃棄する必要がございますが、実際には、今回3校で誤廃棄がございました。いずれも、28年の1月から3月にかけて行われており、保存期間が守られていなかったということでございます。原因といたしましては、職員は保存期間が1年と定められていることを認識していながら、答案を搬出して移動する際に、廃棄しても差し支えない文書との区別を曖昧にしまったため、廃棄しても差し支えない文書の中に、答案の束が紛れ込んでしまって、一緒に廃棄をしてしまったということでございます。また、間もなく1年を経過して、廃棄してしまっても構わないと考えて廃棄してしまったということで、保存文書の取扱いについて、意識が低かったと言わざるを得ないと思っております。調査結果については以上でございます。

委員長（田中委員）

はい、ありがとうございました。続きまして、協議に入りたいと思います。ただいま、調査結果について報告がありました。また、学校の聞き取りによって判明した原因についても併せて報告がありましたので、調査結果の報告に係るご質問、また、原因等についてご意見がある場合は、お受けしたいと思います。いかがでしょうか。

説明の順番でまいりますと、まず、時間、期間等のところから順番にご説明があったかと思っておりますけれども、特にここから入っていきたいと思います。

（種田委員）

受検者の数と採点にかかった時間数、そういう表はあるんですけども、採点者の数、結局何人ぐらいが採点に関わったのかという、その数がないと、負担がどのくらいかというのはわからないですけども、その辺の、採点者の数については、どうなんでしょうか。

委員長（田中委員）

採点者の数は分かりますか。

高校全職員かと。教員が関わっているかと思えますけれども。

(種田委員)

学校の規模によっては、大きな学校と小規模の学校とあると、教員の数が違うので、必ずしも受検者が多いから負担が大きいかということ、そうとは言えないと思うので、その辺のところは改めて教えてください。

(事務局)

実際には採点と点検で、前回のマニュアルの中で、お話しさせていただきましたが、延べ一つの問題に対して、採点2名と点検が2名で4名。それから小計・合計のところでも、最初に小計をつけるものと点検で3名。合計でも3名、ということで計10名が関わってございまして、それに、実際、それぞれ5教科ございしますので、当然、延べ人数でいきますと50名が関わっていきますが、そこに、実際役割分担といいますか、そこは確かに、学校によって、同じ一人にどれだけ負荷がかかっているか、それぞれによって違いがあるかと思えます。

委員長(田中委員)

数字は。

(事務局)

今回の調査では、今のところ数字を持ち合わせておりませんので、次回またご報告をさせていただきたいと思えます。職員数は各学校、こちらでも把握はしていますので、それがあれば、お答えできるかなと思えます。

委員長(田中委員)

今は、一人当たりの採点の負担といいますか、その採点に関わっている教員の数とともに示してほしいというご要望ですが、次回、いただければと思えます。今後の取りまとめの方向性にも関わりますので、できれば、お一人ずつご意見をいただければと思っておりますけれどもいかがでしょうか。

(林委員)

確かにこれを拝見すると、相関、数、採点日程で、ほとんど見られないと思うのですね。今、二桁の誤りが出ている学校を見てもですね、例えば採点ミスがごく少ないというわけでもないですし、逆に余裕がありそうな数であっても、誤りの数が多かったりするのですけれど。例えばこの、定量的なデータに、実は出ていないんですね。例えば、この19日にやって、土曜日20日、あるいは21日に

土日を使ったところで、出てくるとか、調べている中で、皆様の方でこういう傾向があるかなというような、仮説的なものをお感じになるものはありませんでしょうか。

(事務局)

実際に、2月の20日土曜日を使って、採点をされている学校もございます。先ほどの資料の5の中で、下から2つめの丸ですけれども、誤りのなかった学校の聞き取りの中では、土日の採点というのは、考えられるけれども、そこは職員の気持ちが採点に向きづらいという風に考えて、あえて土日を使わずに翌月曜日の22日に点検を行っているという学校もございますので、そういう意味では、土日に採点を、日程的にはどうしても採点をしなければならない学校もあろうかと思いますが、例えば、そういうことを避けることで、少し気持ちに余裕を持たせて採点ができる、というような環境が、実際にはあるのかなという風に考えられるところでございます。

(事務局)

今のご質問でございますけれども、土曜日採点している学校は20校あまりあるのですが、全くなかった学校もあれば、やはり誤りが4、5件というところもあります。ですから、傾向として土曜日にやったから誤りがなくなっていくとか、逆に、土曜日来て、モチベーションが低い中で土曜日に採点した学校は、ほぼ全部誤りがあったというような著しい傾向というのは今のところありません。あと、土曜日と更に月曜日も採点日にして、月曜日は本来、生徒が登校して授業をやるんですけれども、そこもあえて休業日にしてやっているところもあり、やはり、その中でも採点の誤りのない学校もあれば、誤りのある学校もある、というような状況です。

委員長(田中委員)

土日を挟むというのは例年、いつもこういう形で、土日を挟んでという、採点の余裕はとっていらっしゃるのですか。

(事務局)

今まで本県では、学力検査の翌日から数えて9営業日目に合格発表という形にしていますので、東京都では、かつては3日で、改善によって4日に増やしましたけれども、本県の場合は先ほどから説明の中にありますように、それに比べれば、学力検査の翌日から9営業日目に合格発表しているという中で、土日が計2回入っている。要は、4日土日が入ったり、暦の中では今年もそういう形になっ

ていますけれども、どうしても9営業日というスパンの中では、必ず土日が1回は入っている状況です。

(佐藤委員)

大変細かい調査をやっていただきまして、ありがとうございます。まだまだ、さらに細かく原因究明のための調査というのは、項目も考えられるかもしれませんが、現時点で出てきた内容を見ると、これらの項目については、大きな相関が見られないという、大雑把に申し上げると、そういうことになると思うんですけれども。答案用紙等を見ていくと、作問と処理方法ですね、この二つがやはりポイントになるのかなという感想ですけれども。まあ、決定的なものがこれから出るのかどうかというのは分かりませんが、あまり期間もありませんので、作問と処理方法という事で、協議が早い段階で進んでいけたらいいのかなというふうには思いました。以上です。

(松本委員)

これだけ調べていただいても原因が見えないという内容を考えると、他にもなにか大きな、見えないところでの原因があるのかなと思って、私、ちょっと考えて、制度のお話させていただいたと思うのですが。環境ですね、部屋がどんなところでやるかということも、人が集中力を持続するためには、とても大事な要素の一つかなと思うのですが、そのあたりは、資料1の中で、「会議室が狭い」というコメントが1つありましたけれども、そのあたりはどのような結果、というかその辺を調べているのか、どのようにお考えになっているのかをお聞きしたいなど。

(事務局)

採点の環境につきましては、聞き取りの中で、こういうことをいただいております、すべての学校の採点を、例えば会議室を、教科ごとに分けているのかとか、どのぐらいのスペースの中でやっているのかというのを、今回まだ、すべての学校で調査ができておりません。ですから、こういった意見が出てまいりましたので、採点環境についてはまた調査させていただきたいと思っております。

委員長(田中委員)

あの、資料1の2ページの中ほどの学校での聞き取りのところの中に、心理的なところも含めてですが、なんとなく他教科に比して遅れているために追いつきたい、あるいは早く終わらせたいという心理が働いた面があるということですが、あってはならない事だとは思いますが、こういうふうなケアレスを誘発しやす

い環境を改善する必要性というのも一つあるのではないか。もう一つは、やはり点検がほとんど機能していなかったというのも問題としてありますが、学校からの聞き取りの3ページのところに、「記述の内容にばかり注意がいきってしまい、誤字や脱字のミスに気づけなかった」、「正答を暗記して採点を行っていた、誤答を正答としてしまった」、「正しく行われているものという思い込みから」といったような、点検が機能していない実態というものを先ほど資料として体制を見ましたけれども。点検が通常通り行われていれば、これは防げたはずなのですけれども。おそらくこれは、点検になっていなかった。そういうことは率直に原因として認めざる得ないことだと思っております。あわせて、資料5で誤りのなかった学校30校の中には、そういうことが起こりうるものだという前提で、かなりシビアに点検をされているということがはっきりと指摘できるかと思えます。もちろん、作問の問題もあるかと思えますが。

(折笠委員)

あの点検の中で、レ点をバツと勘違いしたりとか、マルが1件なかったとか、マニュアルの中にそういうチェック体制が書いてあるのですけれども、学校の方で実際に採点してみると、チェックは細心の注意を払ってやっているのでしょうけれども、現場としてはどんな感覚でやられているのかなと。学校の方でわかる範囲で結構です。校長先生、今日いらっしゃっていますので。

(九石委員)

解答用紙の例が先ほど、ミスの数字が書いてあるもの、資料3ですか、そちらにございますが、いわゆるマル、サンカク、バツという採点は、例えば英語で言いますと、問1の(ア)のNo.1、No.2、No.3、No.4と書いてある問題番号です。このNo.1と書いてある狭い欄に採点をします。そして、採点に関しますので、マルでしたらマルが二つ、二重丸が書かれてという形での採点が、採点1、採点2です。そしてその点検というのは、先ほどありましたように、さらにこの狭いNo.1と書いてあるこの欄の中に、レ点が二つ打たれるという、そういう形で、回数を追うごとに、問題番号の書いてあるこの欄が、非常にたくさんの記号と見えますか、視覚的にすぐにぱっと頭に入ってこないような状況が、採点が重なるにつれ起こってまいります。そういう中で、例えば1回目に採点1でマルとしたところを、2回目の採点でこれは、マルではなくバツだったという場合には、さらにそこに、またバツという記号が書かれ、さらに訂正印が押されると、視覚的に見たときにぱっと理解しにくい、そのような表記が採点や点検を追うごとに増えていく。そういう状況の中で、欄の狭さという部分ですとか、そこに、たくさんいろいろなものを記入しながら採点していくという事の認知のしにくさ、そうい

う部分は感じられていると思います。その例としまして、先ほどの、バツの違いですとか、レ点の読み違いですとか、そういうところにも繋がっていくのかなと感じます。

委員長（田中委員）

これは前回の資料としました基本マニュアルの中に、こういう部分ですね、さまざまな記号がこの狭い空間の中に書き込まれるという事で、ミスを生じやすい原因があるのかもしれないということでございます。

（林委員）

神奈川県の方、前回の後、お聞きしてみたのですが、現物の解答用紙は、この欄に、今、先生がおっしゃったように、ものすごくたくさんの記号が並んで来て、さらにそれが、皆さん今一枚を見ていますけれども、実際には多分、これが、二穴かなんかあいて、何十枚単位でめくっていくわけで、相当見にくいことは確かだと思っただけです。われわれ大学の入試でも採点をするわけですが、例えばうちの教員に、この欄に採点してくださいと言ったら、おそらく怒られます。ここにどう書けというんだというぐらいに。非常に点検も見にくいので、一つ、正直に申し上げて、採点のマルとかサンカクの評価が分かりにくい構造になっているのかなというのがあります。それから、先ほどお話にありました配点ですね、何々と何々は4点だけど、それ以外は何点というのは、みんな考えなければならなくなっちゃうんですね、そうすると、でも全部にこれ何点と配点されていけば、別にそれで、ああ、これは2点だとか分かるので、これも採点者というか点検する人間からすると、ひと手間、ふた手間増やさなければいけないことになるので、やはりミスを生じやすいかな、というふうに思います。以上です。

（稲田委員）

今いろいろお聞きして、処理方法でやはりミスを生じやすい要因というのがあるのかなというのを感じました。普通、教員が採点するときは、解答そのものをマルするというのが日常やることで、この入試のマニュアルに沿って、今出たような小さい欄のところに、いろいろな記号、マルとチェックという、いわゆる普段使っている、マルは正解だし、チェックはバツだしというような中でですね、やはり誘発されるのかなという気もいたしました。それから、もう一回、記述式の間接点というところでの、具体的な「輸出」の輸の字が輪になっているのは減点だとか、そういった細かいところというのが、共通認識されていかなければいけないところなのかなということも思いました。以上です。

(事務局)

補足をさせていただきますけれども、中間点、あるいはいわゆる校内での採点の統一化の部分については、今現在、詳細のところを調査継続中でございます、取りまとめ次第ご報告させていただきたいというふうに考えています。申し訳ございません。

委員長(田中委員)

今日の資料では、記述式のところの問題別の集計は、主に用語の記述等々、まとまった文章等の記述というところで、中間点のことは書いてないということですね。そういう理解でよろしいですね。採点するときの表記の欄の狭さという、非常にこう、採点者の立場に立って見ないと見えないところでもあるんですよね。実際に答案をお持ちで、その狭い空間というのは、確かに、ここにこれだけの情報を記入するというのは、かなり、狭い感じもしますね。そこで何回もチェックを入れるとしても、そこでミスが起きてしまうという風に思います。それでは、土佐委員はいかがでしょう。

(土佐委員)

それでは、今の件につきまして、もう少し補足を致しますと、本来実際の答案を見ていただくと、一番分かりやすいと思うのですが、1回目の点検、2回目の点検、採点、それから点検と全て、ボールペンとかラインマーカーのペンの色を変えていくわけです、分かりやすいように。そうすると、想像できますでしょうか、答案用紙がとてもカラフルになって、目はチカチカしてくるといところは確かにございます。現場としては、今、お伝えできる情報をどう解決したらいいのかはこれからのことだと思うのですが、現実問題として、たくさん情報とプラス色ですね、色の情報も非常に多く入っています。(開示をされて、実際は写しをお渡しするので色は分からないかもしれませんが)

(遊部専務理事)

あの前回もお話させていただいたと思うのですが、今日この資料1の採点日数と休憩等のところ、学力検査日の始まりから採点までの、曜日別で見ますと、通常ですと学校の先生は土日休みというので、一年間流れている中で、この採点日が一番体力的にもピークに達した金曜日から始まっている。まずこのスタートラインから、体力限界期からすでにスタートするここがいろいろなミスの始まりなのかなという感じを持っております。例えば面接が終わってから、金曜日、1日あけてから土日で採点を始めながら、いったん一日あけて残り2日で採点をやるというようなやり方も、一般の民間企業でしたら、やっぱり集中力が欠ける

という部分では、同じ人間ですので、そういう配慮が必要なのかなと感じております。また、裏面のほうを見ていただきますと、採点時間の誤りで9時から11時、始まりの時間から件数が、ミスが多いというところも、このスタートの時点でもう、疲れがすでに生じているのかな、一回リフレッシュしながら、別紙でありましたように、30校でしたか、採点ミスのなかった学校の例を見ますと、やはり、朝、学校の先生の方から、しっかり注意喚起をしたのちの採点、朝のミーティングに時間をとりながら、後半スピードアップしていこうという体制をとっていただいたほうが、採点に係る先生方も、体力と持久力も維持できるのかなと、そんな思いがしております。

委員長（田中委員）

そのほかにはいかがでしょうか。

（種田委員）

今、時間のことをおっしゃられましたが、これから採点するというときは、スタートの時点では、まだものすごくたくさん残っている時点と、もうおしまいの方になってあとわずかという時点では、気分的にだいぶ違うと思います。ですから、これからこれだけ大量のものをやらなければいけない、どんどんやっていかなければいけないというプレッシャーがかかるし、ミスも出てくるのではないかと思います。ところが、最後の方になってくるとゴールが見えてきて、ゆっくり時間をかけてできるというゆとりもできて、ミスが生まれるということはないのではないかなと思います。このあたりもあるのではないかなという気はします。

委員長（田中委員）

それでは、原因についてご意見を頂戴いたしましたけれども、出ました意見の中で、一つ、もう少し調査して頂きたい懸案としては、教員の採点にかかる人数につきまして、一人当たり、だいたい何人くらいの受検者の採点をするのかということ。それから、中間点の細かいところの質問がありましたが、調査を継続していただくということで。本日は、一つは佐藤委員からもおまとめいただきましたけれども、作問と処理方法の問題の中で、特にマニュアルの記号の記入する欄の狭さと見づらさとの物理的な原因というものも一つ関係しているのではないかなという指摘が出ましたことが一つ共通の問題ではないかなというのがございます。

作問の方法につきましては、引き続きまた検討いただきますけれども、今言いましたようなカラフルな答案というものを人間の目で採点するということが、どれくらいのミスを生むものであるのか、あまり良い例ではありませんけれども、

東京都の場合、もっと切迫した時間の中での採点ミスが起こった事例がありますので、それを見ますと、採点をする場合に、2通りコピーして2系統で採点して、全く両方ともゼロの段階で突き合わせ、点検するという体制を行うという工夫をしているようです。一人が採点し、それをまた次の方が点検するとどうしてもミスが出ますので、まっさらな目で両方突き合わせる、あるいは一人が発声し、一人が指差しするというような動作を交えたような点検方法を入れていけば、こうした原因を取り除けるのではないかというように思います。それから、もう一つは採点者の体力的な限界と申しますが、集中力の限界というものがやはりあると思います。これは、人間であればどうしても出てくる問題でありますけれども、これについての採点体制の問題を併せて考えていくという必要があると思います。他に付け加えたいことはございますか。

(遊部専務理事)

学校の先生方はよく模擬授業等をやられると思うのですが、新任の先生もこの採点に関わっているかと思えます。採点の仕方に対して、模擬レクチャーみたいな模擬授業のようなことはやったことはあるのでしょうか。

(土佐委員)

それでは、現場の方から回答します。一応、入学者選抜に関しましては、本校では2度程マニュアルの説明、特に新任の先生につきましては、個別に指導するなど工夫しております。県全体で初任者を集めてということはしておりませんが、学校で配慮してございます。

(遊部専務理事)

それは春先か、それとも受検が近くなってからか、決まった時期なのでしょうか。

(土佐委員)

受検が近くなってきてからですね。

委員長(田中委員)

事務局の方からは何か。

(事務局)

やはり、今言われたように多くの学校で、校内でマニュアルをきちんと、入学者選抜業務についての内容、それから、先ほどご紹介がありました基本マニュアル、こういうことについての説明をいわゆる職員会議というような場を使って、

入試が近づいてきた 12 月頃から順次やっているものと承知しております。

委員長（田中委員）

東京都の場合ですけれども、かなり新任者に集中的なレクチャーをやるようになったということを聞いています。このマニュアルでの、例えば記号のつけ方といったところまでは細かく、ある程度事前にかなり練習しないと難しいかなと思います。

原因として主に作問に関わる問題と同時に採点の点数、記号を記入する欄の改善などの問題があるのではないかと確認させていただきます。次にこうした採点の誤りを無くすために、どのような再発防止・改善策を打ち出したらよいかということの協議に移りたいと思います。再発防止策について、具体的な提案がありましたらよろしくをお願いします。

引き続き申しまして、この基本マニュアルの改善を図っていかねばならないと思います。もっとシンプルに、そして、できるだけミスを起こさないというのと同時に、点検の方式について、1つの答案について2つコピーして2グループで採点してそれを突き合わせるといったような点検の方式をとるといったのが改善策としてあるのではないかと思います。ケアレスはどうしても起こりうるものですので、問題はそれに対してどれだけ対応できるかということですが、資料5で、ミスの無かった学校でやってらっしゃること等は、その例として非常に参考になるのではないかと思います。

（佐藤委員）

再発防止について、一つは、相関が今回の調査では見られなかったこと、それから 29 年度の入選の採点において、例えばミスが半分になればいいというものではないわけです。教育長が言われたように、あってはならないということで、それに対して決定打が今回出なかったということを考えれば、根本的な違った方法で、前回も出ましたけれども、私としてはマークシート方式の導入というふうに考えるのですが、東京が今マークシートをやっていますので、その課題などもいくつか出ていると思います。マークシートだから必ずしもミスが減るというものではないとか、記述式をどうするかといったことがあるわけですけれども、ただ、今言いましたように、相関が見られないと言うことと、29 年度に向けてということ考えると、話が戻ってしまいますが、マークシートという選択肢が一番だと思います。

委員長（田中委員）

ありがとうございました。基本、選択式の問題に関して、マークシートという

ことですよ。

(佐藤委員)

そうですね。ただ、記述式も、東京都では全部ですよ。デジタル化して採点するという。基準を入れれば、記述式も採点できるというのもあるようです。その具体的なものはちょっと分かりませんが、前回出たのは、記述式以外はマークシートで、記述式だけは学校で集中してやるといった、いろいろなやり方は考えられると思いますが、大きな相関があれば、そこを改善すればいいのですが、それが見られないのであれば、根本的に変えていかなければ難しいと思います。以上です。

(林委員)

記述の解答の採点というのは、その教科の方が当然されるわけですよ。そうでない記号の問題は教科の方だったり、お手伝いいただいたりと、客観問題の負荷をマークシート方式で減らすことができれば、教科の先生は2問か3問ある記述問題に集中できるというメリットがあると思います。むしろ、気がかりは、受検者側がマークシートの解答用紙と書く解答用紙と分けなければいけないので、2つに受検番号、名前を書くなど手間がかかるのですが、中学の側でそれをよしとしていただけるのであれば、それが客観的な問題については間違いが少ないし、採点する側も記述の方に集中できるので、多分、先ほどの集中力といった問題や日程には余裕があるのですが、今言った授業時間の問題で、そうそう休校にはできないわけですので、そう考えると一部は機械に任せて、一部は人間が採点するといった、その記述だけの問題であれば、先程の点数のマルつけなども大きくできるので、いろいろな面で採点もしやすいのではないかと、今日ここに来るに当たって思ってきたことです。

(佐藤委員)

別紙という形は、記述式を学校で採点するというのであれば、当然やむを得ないことですがけれども、今の問題のように、一つの教科の問の中に記述式が何箇所かあるという形の別紙だと、あちこちいたりしないといけないので難しいと思います。やはり記述式は問の最後のほうにまとめるという別紙であれば、それほどの負担にならないと思いますし、当然事前の指導も中学校でお願いすると。途中で記述式が出てくると、別紙だと厳しいかなと思います。

(林委員)

大学の入試によっては、マークシートの様式に書かせるというところもあるの

ですが、文字がかすれたり、消えたりするのです。ですから、先生が言われたように、どこに配置するか、最後にとか、ある大問の最後にするとかしないと、確かに受検生は混乱しやすい。そこが、今度は作問上の問題、制約が出てくるかと思えます。

委員長（田中委員）

入試に係る問題ですので、マークシートでは受検者の適正な選抜方式にならないというご意見もあるとまた違ってきますが、少なくともケアレスミスを誘発しない、より受検者の利益になるような方式ということで考えますと、マークシート方式かと。それから、記述式に関しましても、今、国の方でも、高校あるいは大学入試でも記述式の導入で、採点にかかる事務的なコストによって、コンピューターでかなり採点ができるような部分も、段々できつつあるというのを聞いております。これは少し時間がかかるかと思えます。今の神奈川県の問題を見ますと、かなり記述式のウェイトが大きいです。27年度、28年度だけ似たようなパターンで、たぶん受検者が予想しやすいのだろうと思えますけれども、この記述式をこのような形に入れるということが少しパターン化しているという感じもしますが、このことも含めて改善していただければと思います。例えば証明の問題は、証明だけでこれほどのスペースをとっていますね。ここで19件もミスが発生しています。できるだけ具体的な提案をいただいた方がよいので、今、マークシート方式という具体的な提案が出ておりますので、これについてはどうでしょうか。

（土佐委員）

マークシートについては前回は提案がありましたけれども、それについての意見というよりも、懸念されることとして、現中学3年生が平成29年度の入学生として、準備が間に合うのか、問題の形式が変わるという大きなことですので、それが1点。もう一つは、ただ、解いて1、2、3と記述していくよりも、マークすると時間が2倍くらいかかるのではないかと思われる。そうすると、作問の量的なものを、あるいは、今は1日に5教科実施しているが、それが2日間になるのか、試験時間を延ばすか、問題の量を減らすかという話、その辺の問題も出てくるのかということをおし懸念しております。

委員長（田中委員）

前回はありましたけど、全国一斉学力調査をマークシートで受けているわけですが、まったく初めてというわけではないと思いますが、入試でこれが取り入れられることによる不安などがあると思えます。

(折笠委員)

例えばその作問、今までずっと試験問題を見ていると、記述問題を含めてかなり考える問題もあったのですが。25年度から記述が始まっていると思いますが、中学校の方として、あのくらいの量であのくらいの考えさせる問題はどのような評価というか、適正なのでしょうか。少し多いのかなとか、何かありますか。

(稲田委員)

記述式が増えたことについては、個人的には非常に良いかと思っております。知識・理解だけではなくて、考え方とか説明などが。ただ、問題によっては、社会や理科などは難しいかなと感じましたけれども、問題の中に記述式があるというのは、大切なことではないかと思っています。中学校現場でも中間テストや期末テストで、先生方も記述式の思考・判断を意識して取り入れておりますし、評価・評定を出すときも単に知識・理解だけでなく、考える力というところでもやっていますので、入試も当然それが反映されるかと思えます。マークシートについては、一つの方法かと思えますが、このことだけでなく、入試の日程全体にも関わる。要は、例えばマークシートを取り入れたときに、試験から発表まで平日で9日、それでも長いかなという声があるので、マークシートになると早くなるのかなと思いきや、そういったものがないと、日数がかかるということが考えられるのかと、そのようなところも含めて検討の一つかと思えます。

(佐藤委員)

入試問題への対応は中学校では全てではないでしょうが、今、稲田委員が言いましたように、記述式、思考・判断・表現を図るような定期テスト、あと100点満点という形の対応が多くなってきていると思います。

(種田委員)

最終的にマークシートの方にいくというのではなくて、従来の方法でミスが無いやり方をもう少し探る方が大切だと思います。一つは先程チェックだとか色も変えていて非常に複雑で、これは結局、余白のところに採点していくという体制になっているからだと思います。最初の採点者、2番目に採点する人、それから点検者と仮に一つの問題を4人がやるとすると、4人の枠がきちんと確保されていて、そこにきちんとチェックできるという答案用紙を作っていくべきだと思う。余白に採点するというのは、ミスを生む非常に大きな原因になっていると思います。だから少しゆとりを持って、きちんと点検しているか、適正に点検されているかどうか、すぐ分かるような形の答案用紙が必要だと思います。

委員長（田中委員）

確か、東京都の答案用紙には、採点の　　は何点というものが印刷されていて、受検者も見られますが、採点者がそれを見ながらそういう形での採点を想定した答案の印刷というのがなされているという、それも一つの対応策として考えられているというのがあります。今のところは受検者の方ばかりで答案用紙を考えて、採点者の方を見てこなかったという点では、もう少し余白といいますか、記号など表記を入れる欄の工夫を考えていく必要があると思います。特に記述式でのまとまった文章でのミスが圧倒的に多いので、そのところでは、特にそうしたような記述、答案の印刷を改善するということが考えられます。

記号の方の採点についてはいかがでしょうか。マークシートでできる部分と記述式を分けるとまた煩雑になるのではないかというご意見もありましたけれども、再発防止策としてマークシートは、本末転倒という気もしますので、その議論は、また違う機関でやってもらってもよいかもしれませんが、ここでご意見としていただくこととしては、入試の改善対応策としてのマークシート方式の可能性ということについてのご検討は議論していただいた方がいいかと。調査していただきましたけれども、相関があまり見られないということですので、これはもう、ケアレスを防ぐための改善策を徹底して考えるということしかありませんので、そうすると、マークシート方式は一つの記号の選択方式、さらに、より採点が簡易な記述式の方向に転換することになるかと思います。

（松本委員）

マークシートにするにしても同じ方式を継続するにしても、先程言われたように、記述式のところが問題になるのかと。それは別問題として考えていかないといけないと思うのですが、例えば記号で間違えたりするところを2人で向き合っていて、あるいは横同士で、例えば1とか2とか声を出しあって、別の方法を考えることで、100%とは言いませんけれども、ある程度改善できるのかと思いました。それから何が大事かということ、ミスの少なかった資料5のところにもあるように、採点する人のゆとりというか、少し出るだけでも相当これでクリアできていると思います。取り組む姿勢、態度や気持ちなどの部分が大きいと思うので、そういうところももう少し、ここでどのようにするのがいいのかということも話していくべきなのかと思いました。それと、私もどうなのかと思うのですが、資料5の4つめのところの「土日の採点は気持ちが採点に向きづらい」とありますが、仕事をしている人間として、土日に向きづらいと言われると、それでも仕事でやらなければならないのであれば、それに集中してやるべきだろうと。気持ちとしては分かりますけれども、そう思いますので、やはり気持ちの部分がとても大切なのではと思います。

委員長（田中委員）

マニュアルの改善の中で、例えば読み上げ式であるとか声かけ式であるとか、2人体制あるいは2系統での採点といった、もう少しマークシートの導入以前に改善すべきことに力を注ぐべきではないかという意見ですがいかがでしょうか。

（土佐委員）

率直に私も今回のことを受けて、入試のミスだけではなくて、学校運営全体について職員一人ひとりの声を聞いてみたのですが、その中で、マークシートに安直にすればいいというのではなくて、今のやり方でミスを無くすことが大事だという職員もおります。また、普段の定期テストですと大胆に をつけていくのには慣れているので、この狭いところに書くのは、採点というよりも記号を埋めていく作業になってしまうというように申しておりました。ですので、やはり2系統でやるというのは、現場の実際に関わっている職員からも出ている声でございます。

委員長（田中委員）

そういうご意見があるということで、先生方からそのような意見が出てくるといっても頼もしいと思いますけれども、ただ、今回は3回目ですので、どうしても次回はゼロにできるのかというふうに問われたときに、これなら盤石ですという策をここで考えないといけないということでございますので、さらにもう一歩何かあれば。

（遊部専務理事）

先程の採点欄ですが、民間ですと一つの項目に対して下の欄に同じように太枠と点線とで欄を分けて、4人で進行する際に入力の1番手、2番手、3番手とチェックをかけています。どこで間違えたかが分かる、というやり方もとっていますので、先程お話に出ました、解答欄の下にもう一つ枠を作って、生徒には太枠に記入させて、先生方のチェック欄をもう少し大きいものにして、しっかりとみんなが確認できるような枠を取るのも防止策になるのではないかと。また今年度の入試もそうだったと思いますが、今、神奈川県の方で、子どもが減った分、学校の統合という話がありますので、来年度、またどこかの学校に入試の選抜で、どこかにどっとニーズが偏るとい現場の大変さが起こるのかと気にしているので、量が増えることに対して、今までと同じやり方で、同じ日程でできるのか、ということをしつかりと現場の先生に意見を聞いて、改善を図っていければと思います。

委員長（田中委員）

マークシートの導入というご意見もある一方で、今の方式の更なる見直しという、特にマニュアルの改良、答案用紙の印刷の形式や採点者のチェック欄を太枠の記入欄にして、チェック欄は採点者向けという、そのような形で、採点者により記入しやすいような方式による再発防止策という具体的なご提案がありました。東京都と比較して、採点のスケジュールが9営業日に渡っており、比較的余裕があるということですが、これが実質的にどんな形になっているのか。まず、判定会議というのが2月25日にあるわけですが、その前に2日間、23、24というのは多分判定会議に向けた資料作りの日取りかなと思うのですが、そうすると22日がどれだけ活用されているのかどうかと、土日を入れるということについても、括弧して採点・点検と書いてあるのも、この辺は非常に微妙なニュアンスを現場に投げかけているのかもしれない。ここはもう入試の採点業務なんだということできっちりとスケジュール化して、密な点検を、次回はゼロということを目指してやるというぐらいの態勢の見直しということを出して、再発防止が図れるかどうかというあたりを考えていく必要があるのかなと思います。これについて事務局から何かありますか。

（事務局）

今おっしゃるように、学校に対しても、いわゆるオフィシャルな採点日というのは19日一日しかない中で、あとは学校長のご判断にお任せしている現状がございます。今ご意見をいただいたのは、もう一日、例えばオフィシャルな採点日を22日に設定するというのも方法の一つかなと受け取らせていただきましたので、そういったことも含めて最後、議論、ご意見いただけるかなと思います。

下のところにある科目数の違い等というところは、学校によっては先ほど説明の中にありましたように5教科プラス特色検査をやっていきます。その特色検査は16日の学力検査日はもう5教科のテストをやるのでいっぱいですので、それ以外の日にやることになっています。ですから、学校によっては、面接を2日間やった後の19日金曜日に特色検査をやっていくという場合がございます。そうすると当然、採点・点検は少し後ろにずれた形で、土曜日を使ったり、22日を休業日にして採点したりというような状況がございます。それから先ほど委員長からありましたように、判定会議の前日、24日は判定会議の原案作りに使われる場合がほとんどだと認識しております。またその前日は判定会議に使う原案の資料の最終点検、採点が全て終わって、それをさらにソートしていったりという作業がございますので、そういった中でのミスがないような点検という形で費やされているという認識をしているところでございます。また、判定会議の翌日、営業日的には合格発表の前に一日ありますが、本県の合格発表は、合否結果通知書というも

のと、合格通知書という2種類のを合格者に渡します。残念ながら不合格になった方は合格通知書をもらえないのですが、それについても一人ひとり名前が書いてあり、受験番号が書いてありますので、全てそれを点検しなくてはならない、その日が今の暦でいうと26日に充てられているのかなと認識しています。

(九石委員)

今、日程のお話が出ましたので、この資料1の(1)は今ご説明があったとおりなのですが、学校現場といたしまして、この2月の中旬から3月の初めにかけての時期は最終学年3年生の卒業に向けた卒業試験が行われている学校がかなり多いと思います。そうしますと、在校生の3年生の卒業試験の問題作成ですとか、入試とは直接関係がない仕事が学校現場としては並行して行われています。それから、卒業式が、学校によって日程はまちまちですが、3月初旬に行われるような学校におきましては、2月の最終週あたりは卒業式に向けた最終的な準備、あるいは生徒の指導というものも加えて入ってくる業務がございますので、本当に、入試だけの業務ではなく、複層的に業務が重なってくる時期ということがございます。そういう中であって、先ほどありました特色検査を行っている学校については2月の19日を検査日に充てざるを得ない状況ですので、実際に採点は22日を使わないとできない状況と認識しています。そのように考えますと、次年度、あるいは翌々年度の、そのミスをなくすということについては、先ほどいろいろ改善策として出されている対処の方法ということになると思うのですが、入試の在り方ということで、学校によっては学力検査と面接と特色検査の3種類をやることで、当然、採点は6科目になりますので、そういう部分での容量の関係と言いますか、そのあたりも少し関係していないとは言えないのかなというところを感じます。

委員長(田中委員)

それでは一応、まとめをしておきたいと思うのですが、マークシート方式の導入については、実質的な問題、特に記述式が今、記号選択式の中に入り込んでいくような問題になっておりますので、これがどういうふうに見えるものなのかどうかという技術的な問題を少し検討して、他のところでやっている方式も検討していくことは調査と併せて検討課題としていきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

全くマークシート方式に反対というご意見ではなかったと思いますので、その可能性の一つとして考えているということで、記述式の良さ、それから手作業というか先生方が採点されるというものの持っている意味もありますので、こ

れについてのマニュアル上のミスを生じやすいポイントがかなり出されたと思いますので、それを反映させていくことにより、提言していきたいと思います。ありがとうございました。

では最後に事後の検証の方法について議論をいただければと思います。まだ方向性が明確に見えていない中で事後の検証の方法を検討するのは難しいかもしれませんが、再発防止策が正しく機能しているかどうか、来年度の入学者選抜後にも検証する必要があると思います。その方法を考えておかないといけないということなんですけれども、一つには答案の開示請求という制度がありますけれども、これをもう少し簡易な方法を検討して、受検者が確認しやすい方法にするとか、その他の方法もあるかと思いますが、ご意見いただければと思います。

教育委員会から特別の記述の採点に入っただくというのも一つにはあるかと思うんですが、ランダムサンプリング的に入っただくのがどれだけ確率的に精度の高いチェックができるのか、マニュアルを改善したとしてもそれがどれだけ有効かどうかということも、事後だけではなく、事前のあたりからもチェックを入れていただくことも必要かと思います。採点のことについては、場合によっては他の学校のもを全部とは言わずとも少しお互いに相互チェックするという形の検証方法もあるのではないかと思います。検証ということは具体的に調査ということですので、事前にやりますよというのではあまり意味がないのかもしれませんが、やはりある程度ランダムに、そしていつ来ても対応できるようになっている、対外的にもそれを言っているというチェック体制につながるかと思います。内部だけではどうしてもチェックが甘くなるということも一つあるかと思いますが、外部からの客観的な第三者的な、身内といえども身内になってしまうけれども、そうした検証方法を取り入れるということ、これは現に東京都の方ではそういう方式を取り入れているようです。さらに、うまくいっている事例を取り入れることも考えられるかもしれません。

一部の学校でやっているようですが、合否ラインのところの答案については、特に幹部層の間でもう一度チェックをやっていっしょだと、確かに資料5にも書かれています。それはミスを防ぐというよりは受検生の合否にかかわる非常に重要なチェック、これをやっているようです。できるだけそれを他の学校でも取り入れていただきたいと思っているのと、任意でやるのではなくてちゃんとやってもらおう。もっと言うと、指示する中に、ちゃんと検証のスケジュールに入れ込むということになります。そうするとまた時間が足りなくなってくるということもあるかもしれませんが、どの辺りでそういうことを入れていけば一番よいのか、具体的にはいかがでしょうか。

(九石委員)

いまおっしゃられていた、職員の方ですべて合計まで答案を採点した後の再チェック、そういう部分につきましては、土日を使って数名で行うということで効果があった経験がございます。そうしますと学力検査を何曜日に設定し、そこから採点があらかた終わる日程が週末に来ていただくと、終わった採点の答案用紙を週末に確認できるというふうに考えました。日にちの関係もあると思うのですけれど、そういう方法も一つかなと思います。

委員長(田中委員)

中には6科目もやらなくてはいけない、特色検査をやっていらっしゃるところもあるかもしれませんが、そうでない学校もあるわけですので、総チェックする機会を持てると更に緊張感もまた、客観的な面もということでの検証効果というのが考えられるのかなと思います。

(事務局)

事務局から一点、訂正と申しますか、今委員長の方から資料5の中でボーダーの再点検の話をしていただきましたが、すでに資料5の中には、いわゆるボーダーの合否に関わる部分のことは入れてはいたのですが、実際に現場の中では、いわゆる合否が逆転してはいけないという観点で、最後の最後に改めて、そこは逆転が起こらないように上位いわゆるボーダー、上から何点、あるいは下は何点ということで再点検をして、誤りがないということで合否の確定を行っているという学校は多くございます。

(折笠委員)

先ほどの検証ということで、東京都などは答案用紙を受検生に返しているということをはじめたということもありますけれども、実際、中学校の現場として受検生は、自分の答案をしっかりとコピーでもなんでも戻してもらった時、特に何か支障というのはあるのでしょうか。

(佐藤委員)

中学校の方では、特にはないと思います。

委員長(田中委員)

請求がなくても返していくと。

(事務局)

そうではないです。

(佐藤委員)

希望者でございます。

(種田委員)

希望者というのは、結構ボーダーに近い人だと思うのですけれど。もう全然上の方の人は、返してもらって見なくても合格していると。だから全員に返すとかそういうことではなくて。今回の採点ミスというのは、やはりミスはどうしてもあり得るのだと。ミスをなくすことは、まず不可能だと思います。ミスがあるのだという前提の上で、そのミスをどうやってなくすかということ、一番重要なのは点検だと思います。採点することよりも、本当は点検のところにもっとウェイトを置かないといけないのですけれども、どうしても点検する人は、ミスはないものだと思って点検してしまい、ミスをしてしまうのだと思います。でも、やはり最初からミスはあるのだという前提で点検をするということで、点検にもっと時間をかけるべきだと思います。採点・点検というのを時間的に配分すると、点検の方が時間が短くなってしまいます。それだとやはりミスはチェックできないのかなと思いますので、採点にかかる時間よりも点検にもっと時間をかけるということをししないと、ミスを見逃してしまうということに繋がっていくのではないかと思います。だから採点・点検のあり方というのをもうちょっと再検討する必要があるのかなと。今、採点者1、採点者2、点検、点検というふうにやっていたものを、採点をやって、点検やって、もう1回採点やって、点検をやる、改めて。そういうふうにやって、最終的に2回の点検を再度もう1回点検するとか。そういうふうにすれば、もうちょっとミスは少なくなるかなという気もしますけれども。結局、ミスを最初からなくそうというのは無理なので、ミスを点検でチェックする。そこが一番大切なのではないかと思います。

委員長(田中委員)

ミスを発見した人が、それを事前に防いだということが一番望ましいわけです。どれくらいそれが行われているのか。チェックの機能のところを一番検証しなくてはいけないところではないかだと思います。その点で、ヒアリングの一番最後のところに、入試担当の経験者はミスの起こりやすいところを感覚的に分かっているということが書かれていました。分かっているなら、そこをやろうよということなのです。そこをやろうということになっていく学校とそうでない学校、多分感覚的にご存知の方はベテランである。そういう経験値をぜひ検証の中に生かしていただければと思います。種田委員のおっしゃったことはまさしくそういう急がず丁寧という体制というのが一番の検証に繋がるのではないかと思います。

けれども。いたずらに外部からいつ抜き打ちでやるか分からないぞということではなくて、組織の改善としてそれに取り組んで欲しいというふうに思いますので。そのために必要な外部のチェックであれば、ぜひあまり負担のないところで、相互に入り込んだりということなどもできるのではないかと思います。これについては、また議論していただくということで、本日は時間になりましたので、今後、残ってありました中間点の方法や採点における校内での統一化についての問題については調査中ということですので、また併せてご報告をさせていただきます。本日は、大変ご熱心な意見をありがとうございました。以上を持ちまして第2回の委員会を終了させていただきます。司会を事務局に戻します。

(事務局)

熱心なご協議ありがとうございました。次回の日程でございますが、4月28日木曜日15時から県庁新庁舎5階5B会議室で開催したいと考えております。よろしく申し上げます。本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございました。